歌は世につれ！

満留　紀弘（1組）

何の因果か音楽業界に身を沈めて半世紀余り、相変わらず雑用に追われての毎日です。昭和三十七年、縁あってキングレコード（昭和六年創業）に入社、西も東も分からない青二才が業界の片隅に身を置き以来、制作、宣伝一筋、悔いのない充実した人生の前半期でした。

これから後半期に向かって、さて？どんな人生設計を描けばいいのか！音楽（歌）の強力なエネルギーを今改めて思い知らされています。

東日本大震災からやがて三年が過ぎようとしていますが、その復興は仲々思うにまかせず、大きなご苦労を強いているようです。そんな人々に励ましの方法はいろいろありますが、音楽（歌）による支援等はその最たるもののひとつではないでしょうか。

ニュース等でもご存じの通り、被災地での各種コンサートを目にするとき、歌の持つエネルギーをひしひしと感じることが出来ます。

小生も昨年七月末、宮城県南三陸町に出かけました。あの日、町の防災センターから最後まで避難を呼びかけ、御本人は津波に流されたというあの町です。

住民の皆様は高台の仮設住宅での生活を強いられていますが町は全く手つかずの状態でした。こんな時こそ歌の底力を見せつけ、精神的なサポートが必要だなと痛感しました。

音楽にも様々なジャンルがありますが、その一つに歌謡曲（演歌）があります。特に今、昭和歌謡に熱い視線が注がれています。激動の昭和を生き抜き、日本の底力となった多くの人々が歌に励まされ歌とともに泣き、笑い、どれだけ勇気を貰ったことでしょう。

そんな時代の歌つくりのピンポイントに身を置いたことも、それなりにとても幸せでした。

“無から有を作り出す”生みの苦しみも今となってはいい思い出です。これからは昭和歌謡を高らかに歌い・愛し・マイペースで・・・・・・

世は歌につれ！

満留　和子（4組）

年を重ねるごとに文字離れ、人離れが続き、身辺の整理が頭いっぱい、そのような日常で迎えた午年の賀状の中に、同級生のHさんとOさんより八期会便りの原稿依頼がありました。そこで、過ぎし人生の想い出を振り返るきっかけになればと思い切ってペンを持ちました。

レコード会社のサラリーマンだと思っていた我が相棒は、退職するころはすっかり芸能界でプロデュースする人になっていました。

中学、高校時代によく耳にし、口にした三橋美智也さんの「古城」春日八郎さんの「別れの一本杉」続いて二葉百合子さんの「岸壁の母」、詩吟の全国会長、踊りの家元さん達のお世話をしていたようで、そのことが少しずつ分かってきたのは私が六十五歳を過ぎた頃からでした。

朝はキチンと八時三十分に出勤しても夜はいつ帰宅するか不明、土・日曜はほとんど家にいない。退職したら家に居てくれるものと、そればかりを楽しみにしていた私を見事に裏切って、今もあちらへこちらへと出かけて行きます。

会社勤めの過去が少しずつ分かってきた頃、一番びっくりしたことは三橋さん、春日さんのファンは熱狂的で「みちや会」会長のもと（会員三百人程）全国組織となっており、年

に一度のカラオケ大会、大会には遠く広島、青森から出演、昨年は熊本やインターネットで知ったという石垣島からも参加され、私共もうれしいことでした。貸切バスで一泊旅行に出かける時は、三橋美智也の歌ばかりが我こそはと次々流れるのにはびっくりです。

最近はテレビドラマや映画等、その制作に携わった人や物、すべての名前が記録されますが、昭和四十年代はそのような習慣がなく「岸壁の母」などは時の幸運と若さが手伝って相当精力を尽くしたようだが、名前も足跡も残らず影武者であったのが少し残念です。

今はカラオケの審査と歌手希望者の依頼を受け、郷里と東京を年に五～六回往復しています。

仕事柄でしょうが、歌う人ばかりでなく作詞者、作曲者、何年ごろに歌われた曲かがすべて一致して頭の中にあることに感心しながら、ちょっぴりマネージャーをしている私です。

正月二日、午の置物を磨いていたら「めんこい仔馬」のメロディが浮かんできました。

“濡れた仔馬のたてがみを　なでりゃ両手に朝の露
呼べばこたえてめんこいの
オーラ駆けていくかよ丘の道
ハイドー　ハイドー丘の道”

八期会の皆々様、これからは健康第一、喜寿のお山目指してハイドー　ハイドーと行きましょう。

雑感

満留　紀弘

高校を卒業して五十年とは、月日の流れの早さに驚くばかりです。ということは、私事になりますが、故郷鹿児島を後にして半世紀ということになります。

その間の世の中の変革は、あらゆるジャンルで物凄いものがあります。それでも故郷の自然はほぼ変わりなく、私達を受け入れてくれます。特に鹿児島のシンボル『桜島』は、今でも貫禄十分です。かつて十八年間、毎日眺めていた桜島ですが、上京後は帰省する度に挨拶し、励まされ、慰められています。

何かと喧騒な社会の動きの中で、人間と自然の共存が叫ばれ、地球温暖化が重要なテーマとなる一方「昭和という時代」が懐かしく又、見直されています。

それは、とりもなおさず我々が一生懸命生きて、築いた時代でもありました。その中であらゆる現象が生き生きと躍動し、生活の潤いにもなっていました。中でも「音楽」の占める割合は大きいものでした。そんな音楽業界の片隅に身を置いた小生にとりましても、いい勉強となりました。

地球上には人間というちっぽけな生き物、六十六億千五百九十余万人が生きているわけですが、限りある資源とエネルギーをどう活用し、平和で明るい未来をいかに構築していくかが問われています。

八期通信アーカイブス

2009年 第15号
有馬　博文（4組）

１２月２４日、名残を惜しみながら皆に見送られて、ダッカ空港から帰国の途についた。日本への直行便がないため、乗り継ぎで中国の「昆明」に一泊予定だったが、便が一時間遅れて、着いたのが夕方５、６時を過ぎていた。両替店も銀行も閉店しており、持っている中国の現金は、２５元（予約のホテル迄のタクシー料金は２０元ほど）。

タクシー乗り場のどの運転手も日本人と見てか、３０元、４０元、６０元、１００元と言い、７、８人と交渉したが乗せて貰えず、沢山の荷物を持って空港で野宿か？と、途方に暮れた。

困っていると、様子を見ていたタクシー待ちの一人の若い女性が英語で話しかけてきてくれて、事情を話すと快く２０元を差し出してくれた。まさに天の助け、女神に思えた。３０元で無事ホテルに着くことが出来た。

ところが、ホテルに着いて予約確認までは良かったが、宿泊代は「元」で支払うよう言われて、１万円札、１００ドル札、クレジットカードでなんとかならないか交渉すること１時間。フロントの女性も上司に頼んでみてくれたが、OKにならない。夕食もしたいが、ホテルのレストランは閉まってしまうし「元」の持ち合わせもない。またまた困っていると、状況を見ていたラウンジのウェイターが閉店して後片付けをしているレストランへ連れて行ってくれて、シェフに食事を特別に作って貰うよう頼んだ上に、食事代として２０元を差し出してくれた。おかげで、シェフ達に囲まれながらの特別に美味しい温かい食事が出来た。

その後、フロントの女性には個人的に米ドルと元を交換して貰い、ホテル代も無事に精算出来た。「クリスマスイヴに」と大きなリンゴも頂いた。バングラデシュ滞在中の様々な体験に加え、この日、何人もの優しい親切な中国人に会えて、異国で人の心に触れ、忘れられない嬉しい旅となった。